

緩和ケアを受けて

三笠市 工藤さま

工藤さんは平成十七年に左腎がんの摘出手術を受け、ご自宅で過ごされてきました。しかし左側腹部に痛みが出現し、平成十八年六月に疼痛コントロールを目的で入院されました。その後、急激な疼痛の増強があり緩和ケアチームでの疼痛コントロールが行われました。痛みが軽減されるに従い、ご自宅で過ごしたいと考えるようになり、薬剤師や栄養士の指導で、MSWや心理療法士、看護師の協力のもとご自宅に帰る準備を進めていきました。現在は三笠地域での在宅医、訪問看護師などのサポートを受け、奥様とともに自分のペースで自宅療養されていましたが、この十月に病状が悪化し、ご家族に見守られる中安らかに永眠されました。ご冥福をお祈りいたします。この記事は生前のインタビューを元に掲載しました。

『家に帰って見て如何お過ごしですか？』

今は体を少しずつ慣らしていこうと思っています。病院では二四時間看護師さんが居てくれるから何があっても安心でした。食欲は病院に居るときよりも減っていると思いますが、自分のペースでおにぎりを食べたりしています。やはり、家の方が楽しめたりしています。病院だと夜は妻が帰ってしまうからね。

『趣味のアンモナイトは？』

入院前に採った石を少しずつ磨きをかけていたりしています。



今まで集めたアンモナイト

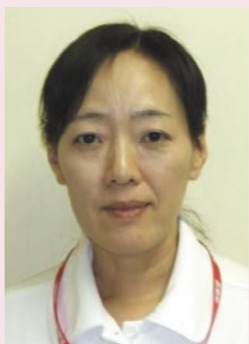
『緩和ケアを受けてみて？』

現在は、在宅の先生に診てもらっていますが、砂川市立病院から入院中のデータを送ってもらい、こちらの先生の診療

に利用しています。砂川市立病院の先生と在宅の先生とそれぞれの良いところがあります。砂川市立病院の緩和ケアチームにはお世話になりました。あのひどい痛みの時には『もうだめだ』と思いましたが、緩和ケアチームには、本当に感謝しています。現在は、在宅の先生に四十分以上もかけてゆっくりと話を聞いてもらい安心しております。

『同じような症状の患者さまに何か？』

このような、サポートチームがあることを知らない人がたくさんいると思います。ただ、「家に帰って下さい」といわれども困るはずですよ。もっと、みんなにこのようなチームがあることを知らせてほしいと思います。みんなと巡り会えて家に帰ってこれた本当に良かったと思います。



緩和ケアチーム 主任看護師 森 佳子

緩和ケアチームという「痛みをとるチーム？」と思われがちですが、痛みや苦痛などの症状を和らげることで生活の質や幅が広がるように各々の専門

特集3 当院における緩和ケア チーム活動について



砂川市立病院緩和ケア委員会 委員長 医師 湊 正意

最近ようやく一般紙などの報道にも時々現れるようになってきた「緩和ケア」という言葉について、皆さんはどのような理解をお持ちでしょうか？何を「緩和」するのか、対象となる病気は何なのか、はつきりとは答えられない方々も多いのではないかと推察します。

そこです。対象を明確にしておきましょう。「緩和ケア」とは「痛みをはじめとする患者さまの苦痛を取り除くこと、あるいは軽減すること」なのです。患者さまの側に立つて考えたとき、これほど当たり

前で医療者に何はさておき実行してほしい診療行為について、特に日本の医療界では、過去あまりにも長く大きな関心が払われず、患者さまの痛みや苦痛が軽視されてきたという事実があります。私たち医師は癌などの病気の原因を取り除くことが最も重要な仕事であると考え、心身ともに耐えられない苦痛にむしばまれていた患者さまに面と向って相対して来なかったと反省を込めて言い換えることもできます。

患者さまの約4分の3は痛みを経験し、さらにその3分の2の患者さまには2つ以上の痛みがあるとされていますが、痛みは病気の状態のみならず、患者さまの精神状態や社会的状況により大きく変化するものですし、痛みがあると食欲も無くなり、だるさ、不眠、不安などからさらに痛みを

強く感じるという悪循環に陥ります。また、「癌の痛み」というと、末期の患者さまから苦痛を取り除く、終末期の医療」と考えられていた時期がありました。それは大きな間違いだったと今は気付かれています。癌と診断が付いた時点から心身の痛みは始まっており、手術や抗がん剤などの抗がん治療と並行して早い段階から痛みの治療（緩和ケア）が施されるべきだと、も



緩和ケア委員会の様子

う既に十七年も前にWHOにより勧告されていたのですから。癌による痛みは決して我慢すべきものではありません。適切で積極的な治療により大部分の痛みは消失させ得るものであり、例えば痛みのために眠れないなどというところに適切に対応できないのであれば病院としての存在価値が疑われます。また、痛みが取れてこそ、日進月歩の癌医療（抗がん剤など）にも笑顔で立ち向かうことができるといえます。

地域がん診療連携拠点病院に指定されている当院では、癌の痛みは病院の総力を挙げてきちんと取ってあげることが目標として、医師（内科、外科、麻酔科、精神神経科、産婦人科、泌尿器科）、看護師、薬剤師、放射線技師、栄養士、心理療法士、ソーシャルワーカーによる緩和ケアチームを結成し、一人ひとりそれぞれ異なる病態や症状を抱えた患者さまに最も適した医療を提供すべく活動しています。まず、「あなたの痛みを伝えてください」！

家が患者さまや家族を支援させていただくというチームです。もちろん、患者さまやご家族もチームの一員です。工藤さんと奥さまの言葉や笑顔は私たちにとても同じように喜んで悩む患者さまにとっても励みになると思います。

今回、ソーシャルワーカーとして緩和ケアチームで関わった工藤さんとインタビューという形で再会しました。ソーシャルワーカーは退院後の患者さまの生活を直接見ることはありません。ですが、話を聞かせていただく中で退院後の課題を地域の医療スタッフとともにひとつつ乗り越えながら、ご夫婦が自らのペースで生活されている姿を拝見させていただき、住み慣れた我が家での生活の大切さを感じました。なにより工藤さんと奥様にお会いできた事、安心とともに嬉しく思いました。



緩和ケアチーム MSW 及川 佑介

※MSW:メディカルソーシャルワーカー